2026－ 2－ 1

46【街の散策からの気づき発見】

中川散策2・「ながぬま橋付近と五ヶ門樋（ごかもんひ）」

会員 K.T.

ながぬま橋（中川）

五ヶ門樋

ながぬま橋から上流

五ヶ門樋・看板

ながぬま橋から下流

五ヶ門樋（右岸から）

中川散策2は、前回の「散策 39 新川橋付近」に続いて、下流の「ながぬま橋」付近と橋から 700mほど下流にある「五ヶ門樋」を散策した。五ヶ門樋は、煉瓦造りの樋門では、めがね橋（旧倉松落とし大口逆除/春日部市八丁目７１０番地）明治２４年(1891)と概ね、同時期、明治２５年(1892)に造られた。もとは江戸時代、下庄内領・水角に設けられていた悪水路の中川への排水口、「水角圦樋(すいかくいりひ)」であることから木製樋門の逆流防止はあったであろう。

五ヶ門樋の看板説明によると、

「埼玉県指定有形文化財（建造物）五ヶ門樋付中庄内樋管１基、排水機場跡１基　　平成２７年(2015)3月１３日指定

五ヶ門樋は、現存する煉瓦造りの樋門としては、県内で四番目に古いものです。煉瓦を四重に並べアーチを形作り、その上には、『五ヶ門樋』のプレートが設置され、最上部には煉瓦で凹凸を表現した装飾が施されていることが特徴となっています。現在では庄内古川からの逆流防止のため扉は外され、自然排水の樋門として使用されています。 古くから庄内古川の流域では、大雨の際の増水で農作物に影響が生じていました。五ヶ門樋は明治２５年(1892)に庄内古川左岸の新堀悪水路（排水路）に設置されたもので、通常時は自然排水、洪水時には扉を閉めて逆流防止の機能を果たしました。しかし、自然排水のみでは年々上昇する庄内古川の水位に対応できず、明治４０年(1907)に排水機場が建設されました。庄内古川の改修後は、自然排水が可能となり、排水機場は撤去され、鉄筋コンクリート製の中庄内樋管が新たに設置されました。

令和2年(2020)3月　春日部市教育委員会　」

春日部市に残る“めがね橋”や“五ヶ門樋”は、明治時代(1868～1912)から大正時代(1912～1926)に盛んに作られた煉瓦建造物だ。現在に残っている有名な煉瓦造りの建物は、“東京駅”・”富岡製糸場”・”横浜赤レンガ倉庫”等がある。建材に煉瓦が使われるきっかけは、明治５年(1923)の「銀座大火」だった。この火事により東京中心地の丸の内・銀座・築地一帯が焼失した。政府は、街復旧にあたり、耐火構造の西洋風の街並みに改造した。街区を整理し、延焼を防ぐため道幅を広くして不燃建材として煉瓦が採用された。煉瓦は、耐久性・耐火性・意匠性に優れた建材だった。煉瓦建材が衰退したのは、大正１２年(1923)関東大震災が起因となった。この震災により、約１０万５千人が死亡（内約９２千人が火災による死者）、また煉瓦造りの多くの建物が倒壊した。耐火性に優れた煉瓦建材は耐震性に弱いという問題を露呈した。象徴的な建物は浅草の１２階建て展望塔“浅草凌雲閣”で、８階部分が折れるように倒壊、多くの犠牲者を出した。この時代、防災への政府の動きは速い、大正１３年(1924)「防火建築補助規則」、大正１４年(1923)都心の麹町区から日本橋区にかけてのエリアと主街道沿いの 381ha の地域が大火構造を要件とする甲種防火地区に指定された。震災後建材は、鉄筋コンクリート構造の建物に移っていった。“めがね橋”や“五ヶ門樋”は、１３４年余を経ても、現役で残っている。中川の流路は、低地を流れているため、水害の多い地域だった。越谷市デジタルアーカイブに明治の大水害が掲載されている。「明治２３年(1890)8月２２日から２３日にかけて降雨が激しく、２３日には利根川沿いで北埼玉郡須賀村大字下中条地先の堤塘が五九間決壊し、下流の南埼玉・北埼玉・北足立・北葛西の四郡下に氾濫、大被害を与えた。（中略）灌水は１３日間にも及び、このため田畑作物の損耗は甚だしく、（後略）」、とある。「五ヶ門樋」は、この時の水害で木製構築物が壊れ、煉瓦樋に建て替えられた。川の流域には、多くの先人たちの水との戦いの歴史がある。２０１９年に荒川防災講義で受講した、「水防災意識社会再構築ビジョン」を思い出した。「施設の能力には限界があり、施設で防ぎきれない大洪水は必ず発生する」、として「『逃げ遅れゼロ』・『社会経済被害の最小化』、減災を目指す」、としている。私達は、防災施設での安全に慣れ過ぎている、と思う。過去の災害を学び、災害への備えに目を向ける必要がある。